

田中秀夫・山脇直司編 『共和主義の思想空間 ——シヴィック・ヒューマニズムの可能性』

佐 藤 光

I

冷戦以後の世界を予想して、矛盾と葛藤^{かて}を糧として発展してきた世界史が、資本主義と自由民主主義の勝利によって「終焉する」、そして、すべてに満足しきった「最後の人間」たちによる「退屈な歴史」が始まる、としたフランシス・フクヤマの議論が誤っていたことは、2001年アメリカの9.11事件や、最近の日本における「経済格差」論議を参照するにつけても明らかなように思われる。が、それと同様に明らかなのは、経済システムにおける資本主義と政治システムにおける自由民主主義以外の代替案がなかなか見つからないことだ。

もちろん、ケインズ経済学や福祉国家のイデオロギーは完全に死んだわけではないし、社会民主主義もヨーロッパを中心に生き残っている。だが、評者の学生時代の反資本主義と反自由民主主義の風潮、要するに、社会主義礼賛の熱気は、こんなものではなかった。スターリン批判、ソ連への幻滅、「党無謬神話」の崩壊、等々の数限りない冷水の洗礼にもかかわらず、たとえば、「まだ中国がある、『毛語録』を手に振りかざした紅衛兵がいる」、「全共闘は闘うぞ」といったフレーズを熱っぽく口にする人々がいた。筆者も、恥ずかしながら、その一員であった。

現実が資本主義と自由民主主義だけで仕切れるはずはなく、それらの^{ほころ}綻びが世界の至る所で露見しているにもかかわらず、それらに変わる有力なイデオロギーが見つからない、という現実と思想のギャップは、必ずしも居心地のよいものではない。というよりも、フクヤマ自身が^{けいがん}慧眼にも指摘しているように、「歴史を終焉させる」はずのイデオロギー自体が、外部からというより内部から崩壊、つまり自壊してゆく強い傾向を持っているのである。

たとえば、自由民主主義とは、「自由」か「平等」か、と問われれば「自由」の方を尊重する人民主権・国民主権の政治システムとイデオロギーの合成体だが、その場合の「自由」は、「……からの自由」、すなわちアイザヤ・バーリンのいわゆる「消極的自由」でなければならない。そして、この場合、「……」部分として主に念頭に置かれるのは、「政治」あるいは「政治権力」である。しかし、自由主義国家、自由民主主義国家といえども、「国家」である以上、「政治」も「権力」も不可欠なはずだ。「国家、政治、権力への自由」がどこかで担保されていなければならない

はずなのである。

しかるに、自由民主主義の思想と現実には、どう^{ひいきめ}鼻真目に見ても、その種の「積極的自由」の居場所が見つけがたく、選挙民の多くは、選挙に行くよりサッカー観戦に行くことの方を優先させている始末である。こんなことでは、自由民主主義の支持者にとってすら、世界政治の行方が不安となるだろう。

II

田中秀夫と山脇直司を編者とし、両氏を含む17名を執筆者として出版された『共和主義の思想空間——シヴィック・ヒューマニズムの可能性』は、こうした時代状況を踏まえて、市場経済と自由民主主義に対抗あるいはそれらを補完する、古くて新しいイデオロギーとしての「共和主義 (republicanism)」あるいは「シヴィック・ヒューマニズム (civic humanism)」の可能性を探った労作である。

もともと、「共和主義」と、「公共的人間主義」とも邦訳される「シヴィック・ヒューマニズム」の関係は複雑であり、「シヴィック・ヒューマニズムはある種の共和主義であるが、共和主義は必ずしもシヴィック・ヒューマニズムではない」（同書「あとがき」p.553）とのことだ。いずれにしても、こうした古代ギリシア起源の政治的イデオロギーが、欧米や日本でいまさらながら注目されるのは、それが、冷戦以後というより、近代が失いつつある市民の能動的な政治参加、「国家、政治、権力への自由」を重視する思想だからであろう。

この思想に関して特に注目すべきことは、能動的に政治参加すべき市民が、「徳 (virtue)」という、ある種の公共精神を具備すべきだとされている点である。有徳な市民の積極的な政治参加による国家あるいはポリスの経営、あるいは、ポリスの政治、公共世界への参加を通じた市民的徳の一層の向上と自己完成——これが、古代ギリシアの政治哲学、特に「政治的動物 (ゾーン・ポリティコン)」という人間観を基底に置いたアリストテレス政治哲学の要諦だった。ただし、本書の著者たちが議論の基礎とするのは、アリストテレス哲学そのものというより、それを欧米の政治思想史研究のなかで現代に蘇らせた、J. G. A. ポーコックの記念碑的な大作『マキャヴェッリアン・モーメント』（以下 *MM* と略記）である。

古代ギリシアに端を発したシヴィック・ヒューマニズムの理念が、キリスト教に支配された中世世界の休眠状態から、15世紀のイタリア、フィレンツェにマキャヴェッリその他の思想家の手によって鮮やかに蘇り、15世紀から18世紀にかけてのイングランドでは、J. ハリントンなどを嚆矢として、いわゆる「コート（宮廷）派」に対抗する「カントリー（地方）派」のイデオロギーを提供し、ヒューム、ファーガソン、アダム・スミスなどの「スコットランド啓蒙派」に深い影響を与えて、「徳」あるいは「バーチャー」から「作法」あるいは「マナー」への読み換えを促進し、さらに太平洋の向こう側に飛び火してアメリカ革命を呼び起こす、というポーコックの、いわゆる「トンネル史観」の詳細を紹介することは評者にはできないし、不必要でもあろう。*MM* その他に

示されたポーコック思想、およびそれをめぐる欧米の論争については、すでに本書の編者の一人、田中による丁寧な紹介と解説があるので、それを参照していただく（『共和主義と啓蒙』ミネルヴァ書房、1998年）。

本書の特徴は、こうした内外の研究の蓄積の上に立って、イタリア、イングランド、スコットランド、アメリカなど、MMが対象とした地域におけるシヴィック・ヒューマニズムとそれをめぐる諸問題をさらに深めると同時に、フランスとドイツなど、MMが十分にカバーできなかった諸地域における同様の問題に関する研究を進め、さらに、今日の政治状況への熱い関心に基づいて、シヴィック・ヒューマニズムを批判的あるいは理論的に考察したことに求められる。

こうした共同作業によって、シヴィック・ヒューマニズムの多くの側面に関する認識が深められ、新たに発見されたことは疑いない。第I部の、ハリントン（第1章）、トレンチャード-ゴードンとボリングブルック（第2章）、ダヴナント（第3章）、バーク（第4章）、J. S. ミル（第5章）らの思想の検討が、イングランド共和主義研究を拡大深化させたものだとすれば、第II部の、フレッチャーとハチスンなど（第6章）、ヒューム（第7章）、フレッチャー（第8章）、アダム・スミス（第9章）、トーランドなど（第10章）の思想の検討は、スコットランドとアイルランドの共和主義研究を拡大深化させたものである。さらに第III部の、モンテスキュー（第11章）、ルソー（第12章）、クオーコ（第13章）、ヘーゲル（第14章）、マディソン（第15章）らの思想の検討は、従来ほとんど未開拓だったヨーロッパ共和主義研究のフロンティアを切り開くと同時に、アメリカ共和主義研究をさらに発展させたものとして高く評価されよう。

特に、モンテスキュー思想などのヨーロッパ共和主義が本格的分析の対象とされたことは、この点におけるポーコックの仕事が示唆に留まっていただけに、注目される。第12章（逸見論文、p.376など）によれば、ルソーの共和主義あるいはシヴィック・ヒューマニズムが、他のフランスの思想的伝統と相俟^{あいま}って、フランス革命を成功させると同時に失敗させたことになるが、こうした思想史的事実は、これまでも当然予想されながらきちんと分析されることが少なかった。門外漢の気安さで注文させてもらえば、こうした分析を、ポーコックおよびハンナ・アーレントなどの示唆を手がかりとして、さらにマルクス、レーニン、トロツキーなどにも進めてもらいたいものだと思う。

III

しかし、評者のような理論や哲学を専門とする者にとって刺激的だったのは、なんとといっても、共和主義の思想史的研究ではなく、批判的・理論的考察を行なった第IV部の二つの論文、すなわち、小林正弥の「共和主義研究と新公共主義」（第16章）と山脇直司の「シヴィック・ヒューマニズムの意味変容と今日的意義」（第17章）であった。

小林論文と山脇論文に共通しているのは——もちろん違いも少なからずあるが——、ポーコックや田中らの仕事の大きな意義を認めながらも、MMに示されているような、すなわち「マキャヴェッリの契機（Machiavellian moment）」を核心としたシヴィック・ヒューマニズム理解が、そ

の源流であるアリストテレスなどのシヴィック・ヒューマニズムとはかなり異質な内容を含んでおり、自らが目指す新しい公共哲学や新しい公共主義には相応しくないとしている点、あるいは、それらの支柱とするには本質的な改変を必要とすると主張している点である。2論文の主張の共通部分を評者なりの解釈も交えながら要約すれば、次のようになことになるだろう。

「マキャヴェッリの契機」を核心としたシヴィック・ヒューマニズム、マキャヴェッリによって再解釈されたシヴィック・ヒューマニズムとアリストテレスなどの古典的シヴィック・ヒューマニズムのどこが違うかといえば、「狐とライオン」(マキャヴェッリ『君主論』池田廉訳、筑摩書房、1998年、p.58)すなわち「狡猾と力」の活用による政治的リアリズム、要するに、俗にいう「マキャヴェッリズム」を基調としたマキャヴェッリ哲学には、古典哲学に見られるような倫理的・道徳的色彩が希薄であること、逆にいえば、古典哲学には、「ポリス政治への参加を通じた自己完成」のような倫理的色彩が濃厚だという点である。小林は、前者を「(世俗的)公共的人間主義(secular civic humanism)」、後者を「(精神的)公共民的人文主義(spiritual civic humanism)」と呼んで区別することを提案しているが(p.510)、この書評では、それぞれ、「近代的シヴィック・ヒューマニズム(modern civic humanism)」と「古代的シヴィック・ヒューマニズム(ancient civic humanism)」と呼ぶことにしよう。

二つのシヴィック・ヒューマニズムは、別のやり方で特徴づけることもできる。マキャヴェッリが『君主論』や『ディスコルシ』(『リウイウス』あるいは『ローマ史論』などとも訳される)で強調したように、近代的シヴィック・ヒューマニズムは、「ライオンと狐」、あるいは軍事力と政治力を駆使して、「ローマ共和国」を「ローマ帝国」へと拡大強化する思想的推進力ともなりうる。それに対して、古代的シヴィック・ヒューマニズムが理想としたのは、アリストテレスが『政治学』に美しく描いたように、「友愛(フィリア)」によって結びついた、高々5万人ほどの市民からなる自足的なポリスの世界である。

ところが、ポーコックは、二つのシヴィック・ヒューマニズムのこうした違いを無視して、マキャヴェッリによって再解釈された非倫理的、政治的、軍事的、帝国主義的シヴィック・ヒューマニズムを、唯一のシヴィック・ヒューマニズムと解釈して議論を展開している。シヴィック・ヒューマニズムあるいは共和主義を今日に生かした新しい公共哲学を構築するには、こうしたポーコックの議論の一面性を批判し、さらに古代的シヴィック・ヒューマニズムの限界をも克服して、より倫理的で平和的で、ローカルな文化的・歴史的多様性を生かすと同時にグローバルな諸問題へも対処しうる、いわば「グローバル」(山脇論文、p.544など)な公共哲学を構築しなければならない——これが、佐々木毅の仕事(「マキャヴェッリの社会思想」上智大学中世思想研究所編『中世の社会思想』創文社、1996年など)に多くを依拠した、小林論文と山脇論文の主張の核心である。

小林と山脇の指摘は新鮮だった。あの「マキャヴェッリズム」のマキャヴェッリを「契機」としたシヴィック・ヒューマニズム解釈に倫理的・道徳的色彩が不足していることは当然予想されてもよいことだったが、MMなどポーコックの作品に親しんでかなり長くなりながら、評者がその点

を意識することは迂闊^{うかつ}にもなかった。しかし、そう指摘されて振り返ってみれば、そもそも「ヴィルトウ」という言葉の意味自体が、「徳」という日本語あるいは漢語の語感とはかけ離れたものであり、むしろマキャヴェッリの邦訳者が正確に訳してくれているように、倫理臭や道徳臭を排した「力」とか「力能」という日本語にするのが原義に近いのであろう（『デイスコルシ』永井三明訳、筑摩書房、1999年など）。

ポーコックがその点にどこまで自覚的なのか、佐々木、小林、山脇のような批判を聞いたらどのように答えるのかは定かでない。こうした問題についてはポーコック研究の専門家の検討に任せるほかはないが、確かに、英米のシヴィック・ヒューマニズムをめぐるMMなどの議論においては、「マキャヴェリズム」はさておき、軍事や所有制度などの物質的基盤に関わる議論が多く、アリストテレスが『政治学』や『ニコマコス倫理学』において展開しているような、「テオーリア（観想）」や「ラケダイモン（幸福）」などをめぐる形而上学的議論は少ないようにも思われる。そう指摘されて、アリストテレス、マキャヴェッリ、ポーコックなどを改めて読み返し、読み比べてみると、そのように思われてくるのである。

逆にいえば、我々は、ポーコックを倫理主義的、道徳主義的に読み込んではいならないということになる。そこに書かれている virtue は、「徳」というより「力」「ヴィルトウ」なのだ。そこに書かれている corruption は、なるほど「腐敗」かもしれないが、その「腐敗」は「悪」とか「罪」に結びつくものでなく、むしろ「無能」や「怯懦」に結びつくものなのである。

しかしながら、こうした反省は、さらに「倫理とはなにか」「道徳とはなにか」という、根本的な問いにも我々を導く。

たとえば、古代的シヴィック・ヒューマニズムは近代的シヴィック・ヒューマニズムに比べて倫理的、道徳的かもしれないが、その場合の「倫理」「道徳」とはどのようなものか。『ニコマコス倫理学』において最も重要視されている「徳」の一つは「勇気」だが、「勇気」が発揮されるべき典型的な状況は、「もっとも美しい状況」（朴一功訳、京都大学学術出版会、2002年、p.119）、すなわち戦場で死に直面した状況である。「熟慮」「節制」「中庸」なども重要であり、「戦士の徳」としての「勇気」だけが称揚されているわけではないが、「政治参加を通しての自己完成」を目指す古代的シヴィック・ヒューマニズムの徳は、宿命的に政治的・軍事的色彩を帯びざるをえず、その分だけ意味は「ヴィルトウ」の語感に近づく。

そもそも、レオ・シュトラウスが強調するように、古代のポリスは「閉じた社会」「小さな社会」であるほかなかった（*Natural Right and History*, The University of Chicago Press, 1953, chap.IV）。「閉じた社会」は他の「閉じた社会」の存在を予定しており、それら複数のポリスは、アテネとスパルタのように、戦いの可能性を秘めている。あるいは、カール・シュミットの口吻^{こうふん}を真似れば、「友・敵関係」を潜在させており、日頃から市民に好戦的態度の涵養を義務づけているのである。

さらに、そのポリスは、内には、「人間」とは見なされない女性や子供や奴隷、要するに、近代人権思想や近代デモクラシーの観点からは「悪徳」と見なされる抑圧的構造の存在を前提としてお

り、古代的シヴィック・ヒューマニズムのいわゆる「徳」とは、そうした構造を「善」と見なした上での「徳」に他ならなかった。

つまり、「倫理」や「道徳」の内容を具体的に考える限り、古代的シヴィック・ヒューマニズムと近代的シヴィック・ヒューマニズムの落差は佐々木、小林、山脇が考えるほど大きくはなく、古代的シヴィック・ヒューマニズムと「新しい公共哲学」の落差は彼らが考える以上に大きなものだということだが、これには、いわゆる「マキャヴェッリズム」という通念への疑問も付け加えておかなければならない。

評者は、書評に当たって、マキャヴェッリの『君主論』や『デイスコルシ』を、どんなに非道徳的な政治的策略が描かれているかと半ば期待して読み返してみたのだが、学内政治などの俗事に塗れた歳^{とし}となったせい、その種の「期待」はあつけなく外れた。周囲の「小政治」「大政治」あるいは「人生」の現実^{とし}に照らしてみる時、そこに描かれ説かれていることが、政治家あるいは大人の人間にとっては当然の心得には見えても、決して「悪魔の陰謀」などには思われなかったのである。

たとえば、次の文章は通俗的な意味での「マキャヴェッリズム」の証左としてよく引かれる『君主論』の文章だが、そこになにか「悪魔の陰謀」めいた、どぎつい思想が込められているだろうか。「このようなわけで、名君は信義を守るのが自分に不利を招くとき、あるいは約束したときの動機がすでになくなったときは、信義を守るものではないし、守るべきものではない。とはいえ、この教えは人間がすべてよい人間ばかりであれば、間違っているといえよう。しかし人間は邪悪なもので、あなたへの約束を忠実に守るものでもないから、あなたのほうも他人に信義を守る必要はない」（前掲訳書、p.59）。

いうまでもなく、残念ながら、現実の人間は「すべてよい人間ばかり」ではない。あるいは、状況のいかんによっては「邪悪」にもなりうる存在である。その点から翻って、「すべての人間は常に邪悪だ」と決め付けることは論理的にも現実的にも誤っており、マキャヴェッリの特に『君主論』にはその種の決め付けが多く見られるが、これは、喜劇作家でもあるマキャヴェッリ一流のレトリックと読むべきで、この文章、それから彼の著作全体の趣旨は、その点にではなく、「性善説が絶対に正しいとは思えない以上、為政者あるいは政治家たる者は、国民の不利を招くなどの恐れがある場合には、他人への信義を破らなければならない場合もあると心得ておくべきだ」という、あまりにも平凡な真実を確認する点にある。評者には、小林秀雄（「マキャヴェッリについて」1940年、『小林秀雄全集 第7巻』新潮社、2001年、所収）のように、マキャヴェッリを（人の眼に付きにくい）「理想家」だとまで断定する勇氣はないが、彼の人間・社会観察にとり立てて非情で異常なものがあるとも思われぬ。マキャヴェッリの主張は、たとえば北朝鮮のような国との交渉に当たる政治家や外交官の当然の心得と解されるべきだろう。

だからといって、我々の政治哲学や倫理学がマキャヴェッリで言い尽くされているというつもりはない。評者は、最も良質なギリシア哲学——ここには明らかにマキャヴェッリとは異質な要素が

含まれている——にも不満を持つ者である。しかし、社会の現実、特に政治の現実が「修羅場」の側面を持つことは確かなことのように思われる。どのように「よい人間」でも、機縁があれば「鬼」にでも「蛇」にでもなる——こうした平凡な現実をすべて引き受けた上でどうするか。「倫理」も「道徳」も、こうした問いと緊張感の上にもみ可能となるものであろう。「新しい公共哲学」を構想する者に、その覚悟はあるだろうか。

（名古屋大学出版会、2006年）